

中1ギャップの克服を目指した小・中学校の連携の在り方
～小・中学校間の交流を通して～

目 次

I	研究主題	4	1
II	主題設定の理由	4	1
III	研究仮説	4	1
IV	研究の全体構想	4	2
V	研究経過	4	2
VI	研究の実際		
	1 研究の基本的な考え方		
	(1) 小中連携について	4	3
	(2) 生徒指導と児童生徒理解について	4	3
	(3) 「中1ギャップ」に対する考え方	4	4
	(4) 「中1ギャップ」の克服について	4	5
	2 中1ギャップにかかわる実態と考察		
	(1) 調査目的	4	6
	(2) 調査対象・時期	4	6
	(3) 意識調査の結果と考察	4	6
	(4) 意識調査の結果と考察のまとめ	4	11
	3 中1ギャップ克服に向けての手立て		
	(1) 交流活動の工夫	4	12
	(2) 教師間連携の工夫	4	17
VII	研究の成果と今後の課題		
	1 研究の成果	4	20
	2 今後の課題	4	20
	〈引用文献〉	4	20
	〈参考文献〉	4	20

研究実践学校 西都市立妻南小学校
研 究 員 新 名 博

I 研究主題

中1ギャップの克服を目指した小・中学校の連携の在り方
～小・中学校間の交流を通して～

II 主題設定の理由

現在、各学校における生徒指導上の諸問題は、基本的な生活習慣にかかわる日常の生徒指導上の問題をはじめ、不登校や中途退学、いじめや暴力行為などのきわめて多岐にわたるものとなっている。これらは、高度情報化や都市化、少子化といった急激な社会変化の中、教育力が低下してきている家庭や地域社会、子どもたちの多様な実態に十分対応できなくなっている学校等、それぞれの力だけでは、小・中・高校生の健全育成に対応しきれない状況が見られる。平成13年の少年の問題行動に関する調査研究協力者会議報告書は、ネットワークとして家庭や地域社会と学校が、一体的に行う行動連携が必要だと述べている。しかし、このネットワークも心身の発達の早期化が叫ばれる今日、学校種間を超えない各学校単独での構築では、カバーしきれない生徒指導上の諸問題が出てきたと述べられている。このような状況の中で、学校においては、子どもたちの確かな学力と豊かな心、健全なからだの育成を目指すために、これまで以上に同じ地域で子どもたちを育てていく学校同士の連携が必要となってきた。

「学校教育を中心とした宮崎の教育創造プラン」(平成15年3月)によると、子どもの成長の過程から見れば、各学校段階における学習活動は学校間においても連続性をもつべきものであると示され、さらに、幼・小・中・高を通した一貫した指導体制の構築が必要だとしている。その中には、学習指導や生徒指導など総合的な観点において、情報交換を組織的・計画的に行っていく必要性から「一貫指導体制を確立するため、幼・小・中・高が情報交換、協議等を行う取組を推進する。」¹⁾と施策の展開が示されている。

西都市では、平成19年3月に「平成18年度市民満足度調査報告書」を作成した。その中に「学校教育の充実」の項目があり、市民の回答では、重要度が33項目中13位にもかかわらず、満足度が25位と低い現状である。これを受けて、西都市は、第三次西都市総合計画後期計画(1)「特色ある学校の創造」(学校教育の充実)の基本構想内容に、小・中・高連携一貫教育構想を加えることで、更なる学校教育の充実を望む市民のニーズに的確に応えようとしている。

妻中学校区の学校(あさひ幼稚園、妻北小、妻南小、妻中、妻高)は、平成18年度より、文部科学省の「人権教育総合推進地域事業」の推進協力校の指定を受けた。各学校では、それぞれの発達段階に応じて、全ての人々の人権が尊重され、相互に共存し得る平和で豊かな社会を実現するために、自分の大切さとともに他人の大切さを認めることができる児童生徒の育成に努めている。

しかしながら、この事業が、妻中学校区の連携事業として始まったにもかかわらず、カリキュラム作成は自校の実態のみに視点を当てたものになってしまったり、お互いの学校のことをあまりよく知らなかったりする現状も見受けられる。また、小学校の頃、生徒指導面で特に問題がなかった児童が、中学校に進学して不登校になったり、悩みや問題を抱えたりするなど中1ギャップと思われる現状が見られる。さらに、詳しい情報が中学校から小学校へ伝わるのが遅く、小学校の教師が問題を把握できていなかったり、一方では、中学校の教師にその子どもの小学生の頃の情報を伝えておらず、手立てが遅れたりする場合も見受けられ、小・中学校間の在り方にも課題がある。

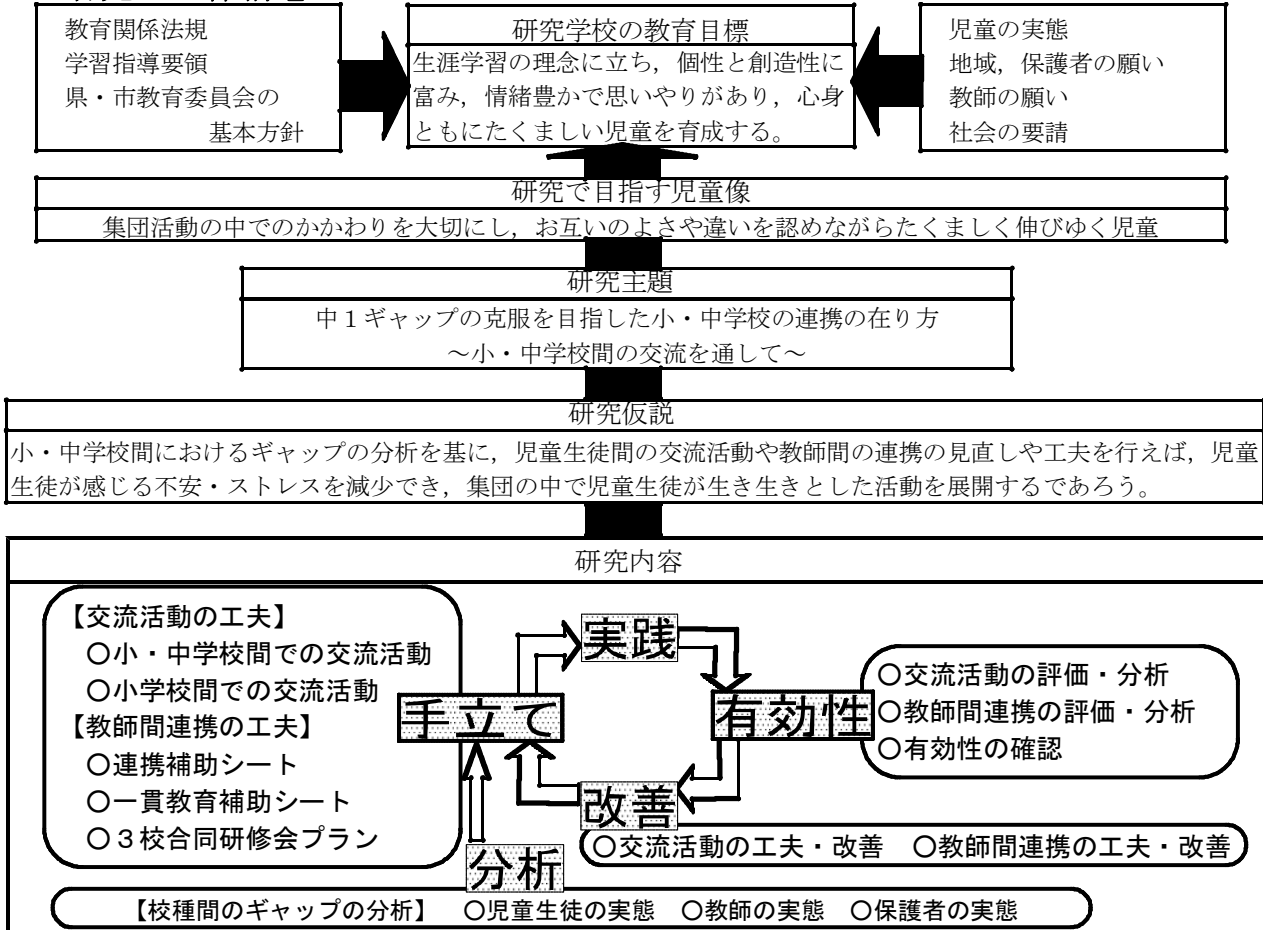
そこで本研究では、中1ギャップの克服を目指した教育を進めるために、特に、小・中学校間の連携の在り方を考える。その手段として、小・中学校間におけるギャップの分析を基に、集団活動の中で児童生徒が生き生きとした活動を展開することができるように、児童生徒間の交流活動や教師間の連携の見直しや工夫等を行う。

本研究を進めることは、学校種を超えて一貫した指導ができるとともに、児童生徒が感じる小・中学校間のギャップをできるだけ克服しやすくし、小・中学校の連携をスムーズにする上でも意義深いと考え、本主題を設定した。

III 研究仮説

小・中学校間におけるギャップの分析を基に、児童生徒間の交流活動や教師間の連携の見直しや工夫を行えば、児童生徒が感じる不安・ストレスを減少でき、集団の中で児童生徒が生き生きとした活動を展開するであろう。

IV 研究の全体構想



V 研究経過

月	研究内容	研究方法
4	○主題・仮説・研究内容の検討 ○年間計画作成	理論研究
5	○主題・仮説・研究内容の検討	理論研究
6	○先行文献等資料のまとめ	理論研究・調査研究
7	○先行文献等資料のまとめ	理論研究・調査研究
8	○研究理論の構築	理論研究
9	○実態調査項目の検討	理論研究
10	○実態調査項目の作成	理論研究
11	○実態調査の実施，集計	理論研究・調査研究
12	○実態調査（校種間ギャップ）の分析，考察	理論研究・調査研究
1	○手立ての構築及び研究のまとめ（報告書作成）	理論研究
2	○研究のまとめ（報告書・プレゼンテーション作成）	理論研究
3	○研究のまとめ（発表原稿）	理論研究

VI 研究の実際

1 研究の基本的な考え方

(1) 小中連携について

文部科学省は、「今後の不登校への対応の在り方について（報告）」で、小・中学校間の接続を図る観点からの具体的な配慮例として、次の9つの観点を示している。

- ①中学校区の地域コミュニティでの合同の活動
- ②小・中合同の教育活動の実施
- ③連携カリキュラムづくりの実施
- ④小・中学校間の教職員の交流や兼務等の人事上の工夫
- ⑤中学校の新1年生担当教員として必要な資質を考慮した教員の配置の工夫
- ⑥小学校高学年において部分的に教科担任制を取り入れる工夫
- ⑦小学校高学年を対象とする中学校への体験入学の実施
- ⑧学校や学年の開始時期における集中的なオリエンテーションを設ける
- ⑨小規模小学校から中学校へ入学した者への入学時の学級編制上の配慮を行う

本研究では、このうち、①②③④⑦を参考に研究を進める。

また、本県では、「平成19年度はばたけ！宮崎の子どもたち」の中で、みやざき発『連携型一貫教育』の創造を掲げている。みやざき発『連携型一貫教育』とは、隣接あるいは近隣の小・中・高等学校が一体となり、目標や課題を共有し、地域の実態を踏まえ、その特性を生かして、系統性のある継続的な指導を行うことにより、子どもたちによりよい教育環境とより質の高い教育を提供し、学力向上や地域に自信と誇りをもち地域に貢献する人材の育成を目指すものである。一貫教育として考えられるメリットは次の5つである。

- ①系統性・一貫性のある教科指導により基礎学力の定着
- ②連続性のある学校生活により安定感を生み出すこと
- ③多様な交流活動による豊かな人間性や社会性の育成
- ④長い期間で児童生徒の個性や可能性を伸ばすこと
- ⑤地域に自信と誇りをもち地域に貢献する人材の育成

本研究での「中1ギャップ」の克服を目的とした小中連携は、義務教育9年間での近隣の小・中学校『連携型一貫教育』を考えている。そこで、5つのメリットの効果を一度に期待するのではなく、妻中学校区のこれまでの連携状況や客観的に見た児童生徒の人間関係のつながり等の状況から考え、生徒（生活）指導の観点から研究を進めることで、メリットの②③④についての効果を期待している。そこで、本研究での小中連携においては、研究実践学校区にどのような「中1ギャップ」が存在するのか実態把握を行い、そこから見える課題の分析から手立ての見直しや工夫を行っていく。

(2) 生徒指導と児童生徒理解について

生徒指導の意義について、生徒指導の手引きでは、「積極的にすべての子どものそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活が子どもの一人一人にとっても、また学級や学年、更に学校全体といった様々な集団にとっても、有意義にかつ興味深く、充実したものに

なるようにすることを旨とするところにある。」としている。
また、生徒指導の意義は次に挙げる5つの角度から見られている。

- ①個別かつ発達的な教育を基礎とする。
- ②一人一人の子どもの人格の価値を尊重し、個性の伸長を測りながら、同時に社会的な資質や行動を高めようとする。
- ③子どもの現在の生活に即しながら、具体的、実地的な活動として進められる。
- ④全ての子どもを対象とする。
- ⑤統合的な活動である。

その中で、具体的に、子どもの社会生活には、子どもの人格の発達にとって望ましい働きや影響だけがあるのではなく、人格の発達にひずみを与えたり、問題行動を起こさせたりするような要因もあることを示している。そして、いろいろな問題に直面し、実際にそのような社会の中に生活しながら子どもは発達（成長）すると述べられている。

しかし、全ての子どもたちが順調に成長していくとは限らない。全ての子どもたちの健全な成長のためには、教師が、子どもの実態を見つめ、正しい理解を進めながら、望ましいと思う経験や活動を組織的、計画的により多く与えることや、望ましくない要因や影響をできる限り軽減することが生徒指導の活動の中にも含まれる。このような、子どもたちの成長にかかわる要因を分析したり、教師がその要因を把握したりすることが重要であり、小中連携においては、それらを義務教育の9年間を見通して行わなければならない。

そこで、小中連携を進めるに当たって、義務教育9年間を見通して児童生徒理解を進めていく共通の視点を設ける必要がある。また、その視点に沿って生徒指導の推進を行うには、学校間における連携・協力を密にしていかなければならない。そのためには、児童生徒を共通理解するためのシート等の作成を行うなど目に見える情報の伝達を行ったり、小学校と中学校が組織的に協力・指導できる体制の構築を進めたりする必要がある。このように、互いに義務教育9年間を見通した児童生徒理解を行いながら、組織として確実な連携を行っていくことが大切である。

(3) 「中1ギャップ」に対する考え方

新潟県教育委員会の資料によると、「ギャップ」は成長していく段階で数多く見られる。未就学児が小学校に入学した直後に起こる「小1ギャップ」、小学3年生への進学時に正規の人数でクラス編制が行われる（小2まで少人数体制の場合）「小3ギャップ」、思春期の入口となり大人全般への反発や人間関係の問題が起こりやすい「小5ギャップ」、中学校に進学し、慣れてきた直後に発生する不適応の問題が「中1ギャップ」、進路選択が大きな目標でもあり課題となってしまう中3の時期にあると述べられている。

その中でも、「中1ギャップ」は、小学校と中学校にまたがり、その両方に大きくかかわっている。新潟県教育委員会は、その「中1ギャップ」について、中学1年生でいじめや不登校が急増するという現象面のギャップと、中学に進学した子どもたちが感じる小中学校間の学校制度や教職員の指導等のギャップという二つのとらえ方をしている。

確かに、現象面のギャップとしてあげられる不登校は、「平成17年義務教育に関する意識調査」によると、小6から中1の間に全国平均で2.5倍ほど急増する。また、学校がとても楽しいと感じる小学校6年生が37.0%であるのに対して、中学1年生は27.9%と10ポイントほど低下する。それらの要因は、学校、家庭、本人と様々に絡んでいる。筑波大学大学院教授の田中統治氏は、「少子化により家族関係と仲間関係が大きく変容し学校生活への適応力も変わってきた。子どもの社会

的発達遅れが、小・中学校の間で経験すべき通過儀礼を『段差』として意識させている。生活・学習習慣が定着していない生徒層の間で不適応の問題が生じているようである。近年の意欲の低下が学校生活のギャップを広げる原因にもなっている。」²⁾と述べている。

また、中学1年生が感じる教職員の指導等のギャップについては、中学校という環境が変わった別の学校に進学するため、あって当然なのかもしれない。また、実際にギャップに対する不安よりも、中学校進学を楽しみにしている要因であり、新教科の追加や教科の変更も楽しみにしている要因であるし、特に、中学校から始まる部活動を「最大の楽しみ」にしている。

しかし、現代のストレス学説では、「楽しみごと」でさえ、「大きな変化であればたとえ快であってもストレスになる」と考えられている面もある。実際に、部活動への参加が、「最大の楽しみ」からしばしば「最大のストレス」に転じることがある。

新潟大学教育人間科学部助教授、神村栄一氏は、「中学進学というストレスの反応の蓄積やそれをきっかけとした悪循環の先に、中学校での不登校や前段階としての学級不適応、陰に隠れたいじめの増加、各種の心の不調問題がある。」³⁾と述べている。

本研究実践学校の児童の多くが、中学校に大きな希望をもって進学する。そして、その多くは、新しい経験やこれまでの経験への積み重ねをしながら楽しく生活している。しかし、そのような中にも先に挙げたような要因から中学校に入学した後、不登校になったり多くのストレスを感じたりしている子どもたちが存在する。そこには、小学校時代に描いていた中学校での生活が自分の意図していたものと違っていたり、小学校時代の中学校に関する情報が限られていたりするなど、様々な要因が数多く考えられる。

(4) 「中1ギャップ」の克服について

小学校の指導においては、児童を中学校へ送り出す最大限の努力をしている。また、中学校としても、受け入れる最大限の努力をしている。しかし現実には、小学校から中学校への進学に円滑に適應しない中学1年生が増えている。改善として、送り出す小学校と受け入れる中学校の学校間連携の在り方を見直す必要性が大きくなっていく。

東京学芸大学教授、児島邦宏氏は、「6・3制というこれまでの区切り方であれこれ用意してきたものが、今日の子どもの育ち方、生活の仕方、成長の過程とうまくマッチせず、ずれを引き起こし、ちぐはぐになってきたのではないか。」⁴⁾という指摘をしており、6・3制からなる現行制度と子どもの現実の成長の過程や学びの過程との間に大きな段差が生じていると言っている。

では、この「中1ギャップ」と呼ばれる意識の段差を全てなくせばよいのだろうか。一般的に適應行動は、自らが順應していく段階から、環境を選び変えていく段階へと進む。中学1年生も進学の節目をそのような形で乗り切って大人の世界に近づくことができる。つまり、不連続の経験が大事なのである。そして、これまでは、その不連続の経験をほとんどの子どもたちが乗り越えてきた。これまで乗り越えることができたのには理由がある。まず、家庭内の関係が緊密で、多くの兄弟姉妹との関係の中でいくつもの経験を積んだり、厳しい躰が両親を中心にあたりするなど家庭の教育力が高かった。また、地域の中では、異年齢集団での活動（遊び）交流があったり、他の家庭との関係が深かったりと地域の中に教育力があつた。そして、何より6・3制の区切りが子どもたちの発達段階に合っていた。

今日、それぞれの教育力が低下したり、発達段階のリズムがずれてきたりしている。ゆえに、学校教育への期待や担う役割が年々大きくなってきている。学校教育として大切なのは、段差を全てなくすのではなく、児童生徒理解のもと、子どもたちのギャップの実態を明らかにし、子どもたちが大きく感じすぎる段差を、小・中学校間の連携の在り方の工夫・改善によって、子どもたちが自分の力で乗り越えやすい段差にすることである。

2 中1ギャップにかかわる実態と考察

(1) 調査目的

ア 小学校高学年の児童が、中学校進学に対してどのようなギャップを感じているかを、小学校高学年の児童・中学1年生・保護者・教師の意識調査から把握する。

イ お互いの学校とのつながりについて、小・中学校の教師の意識調査から把握する。

(2) 調査対象・時期

ア 対象者：研究実践学校進学中学校区内

妻中学校 中1生徒151名 保護者122名 教師16名

妻北小学校 高学年児童176名 保護者122名 教師20名

妻南小学校 高学年児童184名 保護者141名 教師20名

イ 期 日：小学校 平成19年11月 2日（金）～13日（火）

中学校 平成19年11月15日（木）～20日（火）

(3) 意識調査の結果と考察

ア 交流活動にかかわる意識調査の結果と考察

(ア) 現在の学校生活について

現在の学校生活に対して楽しく感じている割合は、【グラフ1】で示すように、小学生で91.4%，中学生で86.6%とともに高くなっている。

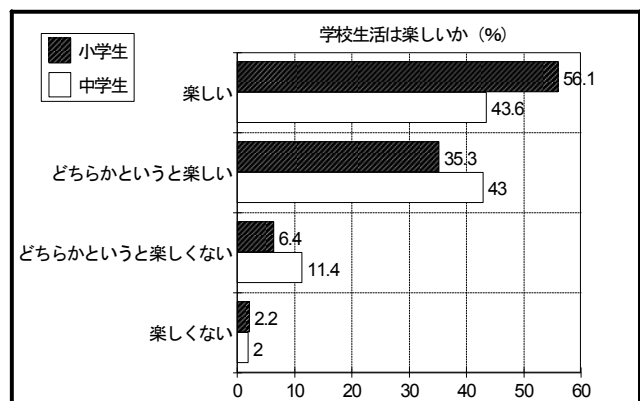
その楽しい理由については、「友だちがいる」「みんなと話ができる」が小学生、中学生ともに高い。学校生活は学習の場であると同時に集団生活の場であり、友だちとのかかわり等、人間関係がとても重要になっていることが分かる。

その反面、現在の学校生活に楽しさを感じられない児童生徒も1割近く存在する。楽しさを感じられない理由については、人間関係に何らかの悩みをもっている記述が多かった。新しい友だちと知り合う中学校進学では、人間関係の構築が、これまで以上に大きな悩みとなってくる。

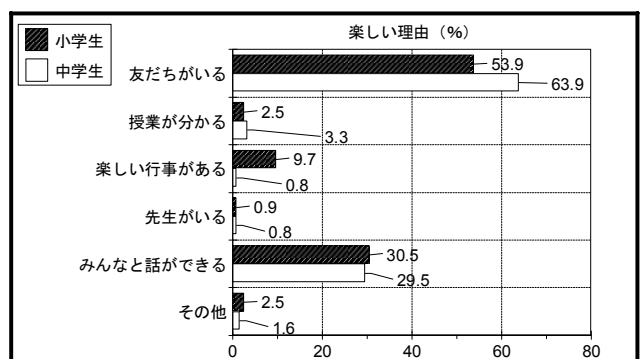
また、これらの結果は、同じ質問項目でデータをとった愛知県義務教育問題研究協議会のものとほぼ同じものとなった。愛知県では、この同じデータから、友達づくりへの支援・配慮の必要性や人間関係が変化する中学入学期のできるだけ早い時期に、新しい人間関係を構築できるような部活動参加への支援や「楽しい」と言えるような行事等の意図的設定の必要性が述べられている。

(イ) 小学校生活での意識と中学校生活への意識

ここでは、小学校現在の意識と中学校生活に向けての意識の関係を見ている。

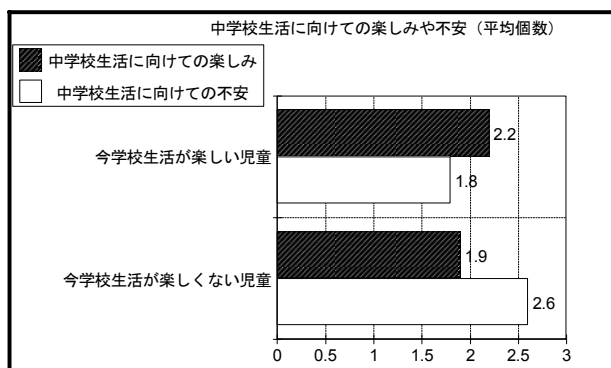


【グラフ1】



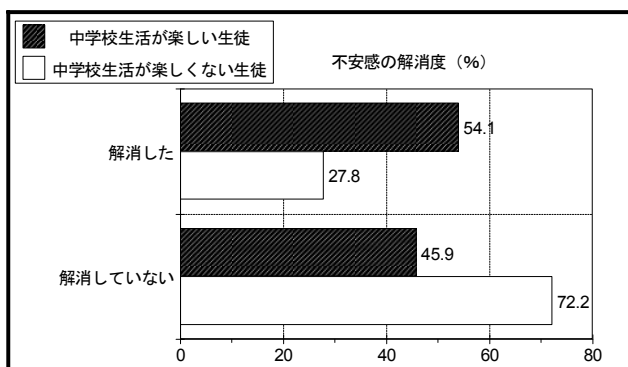
【グラフ2】

【グラフ3】を見てみると、現在学校生活が楽しいと感じている児童は、中学校生活に向けても不安より楽しみの数の方が多くなっている。それに比べて、現在学校生活が楽しくないと感じている児童は、中学校生活に向けての楽しみよりも不安の数の方が多いという結果が出ている。



【グラフ3】

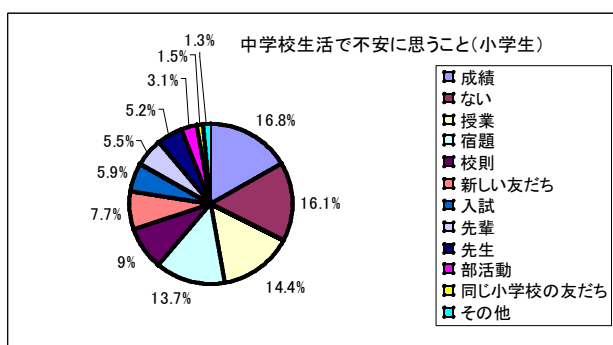
【グラフ4】では、中学校生活に向けての不安の解消度を示した。そこからは、中学校での生活が楽しくなれば、小学生の頃抱いていた不安を解消しやすくなり、中学校の生活を楽しく感じる事ができなければ、不安の解消もなかなか進まないことが分かる。



【グラフ4】

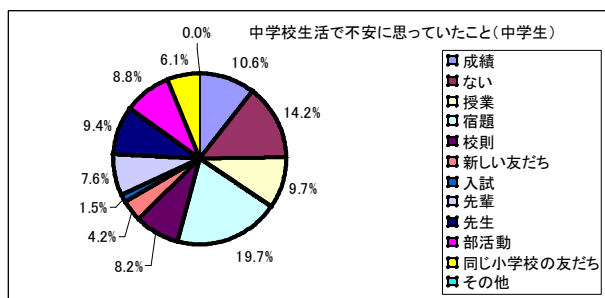
つまり、小学校生活を楽しく感じさせて中学校生活に向けた不安を減らすことや、中学校の生活にできるだけ早く馴染ませて、少しでも中学校生活を楽しく感じさせることが必要となる。

中学校生活に向けての不安に思うことについて詳しく見てみる。【グラフ5】を見ると、小学校高学年の83.9%が中学校生活に向けて何らかの不安を感じている。その内訳は「成績に関すること」「授業に関すること」「宿題に関すること」「校則に関すること」「新しい友だちのこと」の順に割合が高かった。



【グラフ5】

【グラフ6】は同じ時期のことを現在の中学1年生に聞いたものである。「授業に関すること」と「成績に関すること」で順番は変わるものの、小学校段階で不安があった生徒は85.8%を占め中学校生活に向けての不安が高かったことを表している。



【グラフ6】

これらの理由の多くは、「授業がむずかしそう」「どんな授業があるのか」「宿題の量が多そう」「先輩は怖そう」「校則が厳しそう」といった中学校の様子が分からないから不安であるといったものだった。このことは、これから中学校に進学しようとする小学生に、中学校に関する正確で十分な情報が子どもたちに伝わっていなかったのではないかと考えられる。また、小学生に十分な情報が伝わらないということは、兄弟姉妹に中学生がいる場合を除いては、それぞれの家庭にも十分な情報が伝わっていない可能性は大きい。

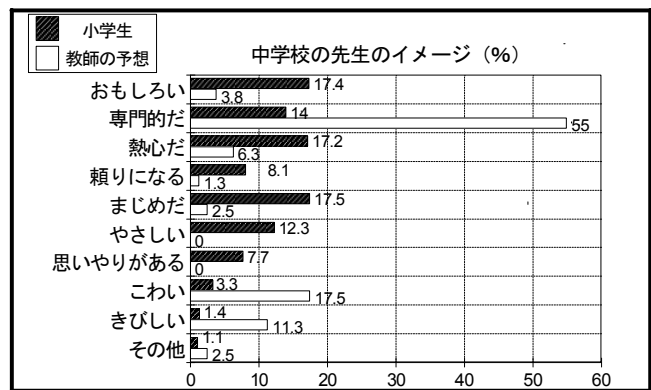
このことから、小学生が、中学校の活動を体験して実感し、正確な情報としてとらえられるような場の設定が必要であることが分かる。

(ウ) 中学校の先生に対するイメージ

情報として伝わるものの中に、進学先の中学校の先生のことがある。そこで、【グラフ7】では、まだ通っていない中学校の先生に対する子どもたちのイメージを聞いた。

まず、子どもたちのイメージを小・中学校の教師に予想してもらったところ、教科担任制を意識して「専門的だ」と考えるであろうと半数以上の教師が予測した。また、「こわい」「きびしい」といったマイナスイメージをもっているのではないかと予測する教師も多かった。

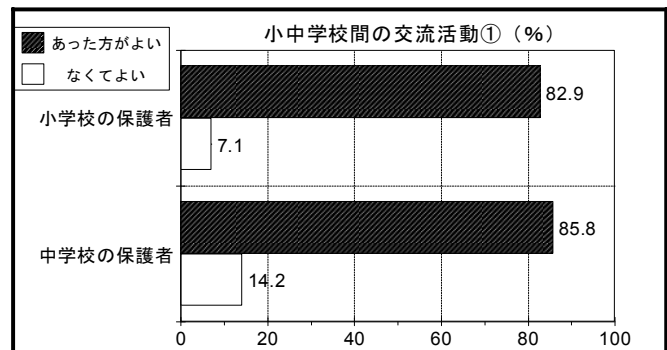
ところが実際は、「まじめだ」「おもしろい」「熱心だ」「専門的だ」の順に割合が高く、子どもたちの大半は、中学校の先生のことを肯定的に受け止めていることが分かった。そのような中、割合としては低いものの、中学校の先生に対して中1ギャップにつながるような否定的な感覚をもっている児童がいることも分かった。不安の割合が高いものに目を向けるだけでなく、このような児童に目を配ることも重要なことである。



【グラフ7】

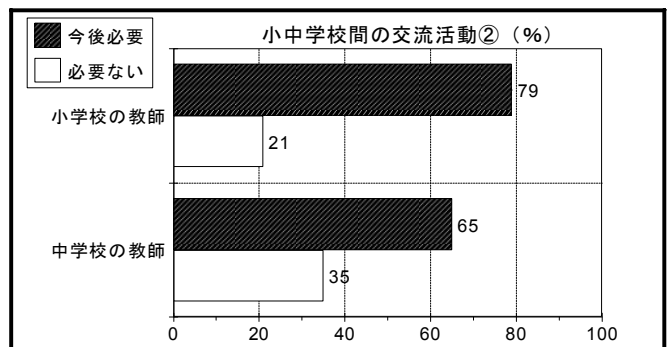
(エ) 小・中学校間の交流活動について

小・中学校間での交流活動について、保護者、教師、児童生徒それぞれに意識調査を行った。【グラフ8】にあるように、保護者は小中学校ともに「あった方がよい」という考えが8割以上を占めている。教師も【グラフ9】にあるように、交流活動は今後必要であるという考え方が多い。その理由として保護者、教師ともに、「中学校の様子を子どもたちが少しでも知っておいた方が、入学した後がスムーズである」というものが特に多かった。

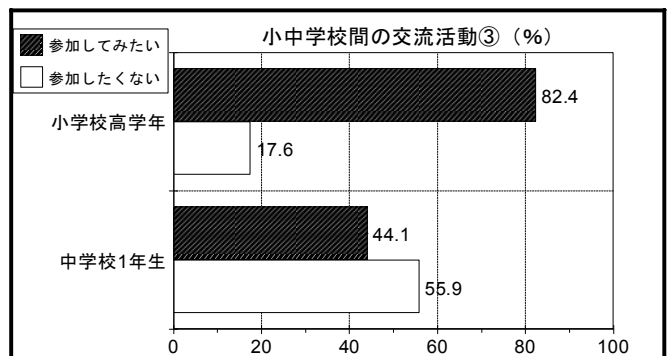


【グラフ8】

実際活動する子どもたちの意識は、【グラフ10】から、お互いの学校の行事へ参加することに興味・関心をもっているかどうかが分かる。まず、小学校高学年の児童は、中学生との交流活動に積極的に参加したいことが伺える。その理由としては、「どんな部活動や行事があるのか知りたい」「中学校の様子が分かる」といったものが多かった。その中でも、部活動については、「ぜひ入学前にやってみよう」等非常に高い割合で興味・関心が伺えた。また、「今、学校が楽しくない」と答えている児童の約7割が、交流活動に参加したいというデータもでており興味・関心が高いことが分かる。



【グラフ9】



【グラフ10】

ところが、中学1年生の反応は小学生と違い、小学生との行事には参加したくない生徒が半数以上を占めた。その理由として、「活動に関してあまり目的意識を感じない」「小学生との活動はや

りにくい」「面倒くさい」といった回答であった。

小学生の多くが、交流活動で中学校の知らないことを知りたい、早く体験したいという多くの期待をもっている。特に、「今、小学校生活が楽しくない」と答えている児童の興味・関心も高いことを踏まえれば、小・中学校間で本活動を行うことは有意義だと考える。また、中学生の実態を考えると、本活動が中学生にとって地域の一員としての存在を自覚したり、年下の子どもたちを思いやるリーダー的な心を培うことができたりする等の有意義な活動になるような手立ての工夫を行う必要性もある。

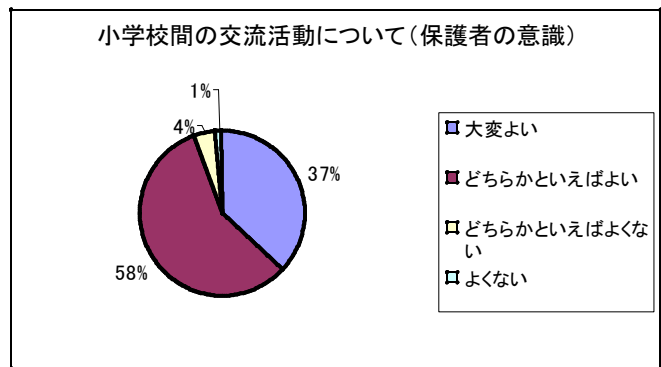
(オ) 小学校間の交流活動について

小学校間での交流活動については、保護者に対して意識調査を行った。

そこからは、「大変よい」「どちらかといえばよい」といった肯定的な考えが 95%と高い割合を示し、保護者の立場として小学校間の交流活動への期待が非常に高いことが分かった。

その理由として、「中学校に入学してからうち解けやすい」「同じ中学校へ進学するのだから、小学校のうちから知り合っ

ておいた方が、中学校でのスムーズなスタートが切れる」「妻北小学校だから、妻南小学校だからという出身校意識を押さえられそう」等が挙げられ、中学進学を視野に入れた回答が多くを占めた。自分自身の中学校でうまく馴染めなかった経験と保護者としての立場から、子どもにはスムーズに中学校生活を送ってほしいという願いが伺える。



【グラフ11】

イ 教師間連携にかかわる意識調査の結果と考察

(ア) 小・中学校の教師が知りたいこと・教えたこと

意識調査では、小学校の教師が中学校の教師にどんなことを知っておいてもらいたいのか、また、中学校の教師が小学校の教師に生徒のどんなことを知っておきたいのか聞いている。以下は、その結果である。

【中学校に知っておいてもらいたいこと(小学校教師)】

- 児童一人一人の個性や実態について
- 児童の学習不振に関しては、個人差があることや何らかの理由や原因があること
- 特別な支援を要する児童についての接し方や指導の仕方について

【小学校時代の生徒の様子で知っておきたいこと(中学校教師)】

- 問題行動(生徒指導)の状況について
- 家庭の環境(保護者の協力)について

小学校からは、児童の学習面や生徒指導面、そして一人一人の児童の個性に応じた指導の仕方等、教育活動内容全般にわたって確実に伝えたいという思いをもっている。中学校からは、その生徒の生徒指導面の情報を最も得たいと考えていることが分かった。

現在、妻中学校区の小・中学校間では、教師間での情報交換を行っている。その多くは、市内の学校が集まる各主任会での情報交換である。妻中学校区に絞ると、子どもたちが、小学校から中学校へ進学する際に、子どもたちのことについての情報を引き継ぐ会が、年度末に実施されている。その場では、小学校6年生の担任が、中学校の代表の先生(2, 3名)に、生活面や学習面、その他にも特に気になる事項がある児童について説明している。また、平成19年度より、3校合同研修会が企画され、年に3回の情報交換を兼ねた研修会が実施されている。

しかし、年度末に行われる小・中学校間の引き継ぎだけでは、正確な情報は伝えきれず、中学校側が把握できない面がある。また、そのときの情報伝達は、特定の児童のみの限られたものであり、全児童の情報伝達までには至らない面もある。仮学級名簿作成の際の情報シートについても、6年時担任のみの所見になり、それまで受けもった複数担任の所見は入ってこない。子どもによっては、6年生時のみに大きな変化があるわけではないため、複数担任の所見が必要になると考えられる。

これらのことから、中学校に引き継ぐ情報は、特定の児童に限らず、全児童の情報を伝えることができることが大切である。また、正確な情報を伝えるためには、複数担任によって各年の正確な情報を書き込むことができるなどを考慮した、連携のためのシートを準備する必要がある。

(イ) 3校合同研修会について

妻中学校区の小・中学校3校では、今年度より、3校合同研修会を開催した。趣旨としては、3校の職員の「互いの顔の見える」研修会とし、学習指導及び生徒指導上の課題や方針等について話し合うことにより、児童生徒の学力向上、健全育成のために相互の連携を深め指導を充実させたいというものである。1回目の会では、妻中進路指導部、各校生徒指導部からの現状報告があり、お互いの学校への質疑・協議を行った。2回目の会では、妻北小学校において授業実践とその参観を行った。3回目の開催は、3学期に妻南小学校での開催を予定している。

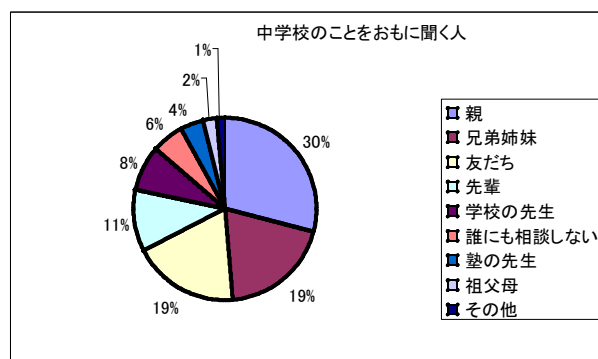
今回は、小・中学校の先生に、「3校合同研修会の良さや課題について感じていることをお書きください」という項目で調査を行った。その結果、「それぞれの学校の先生を知ることができた」「双方の悩みを聞くことができ、聞くことでお互いを理解できる」「生徒の小学生時代のことを聞くことができた」「授業を見て、実際にどんなことをしているのか分かる」等、児童生徒に関する情報交換や先生同士のことを知るができるよさが挙げられた。

反面、「小学校教師と中学校教師に壁があるように感じた」「責任のなすりあいになっている」「お互いに一方通行の所がある」といった互いのよさを十分理解できなかった点や「会の時間の確保や時間設定が難しい」「回数が少なくて今ひとつ力を感じない」「時間が限られているので慌ただしくなり内容が深まらない」「もう少し、生徒指導での連携が必要ではないか」といった会の在り方について課題が示された。

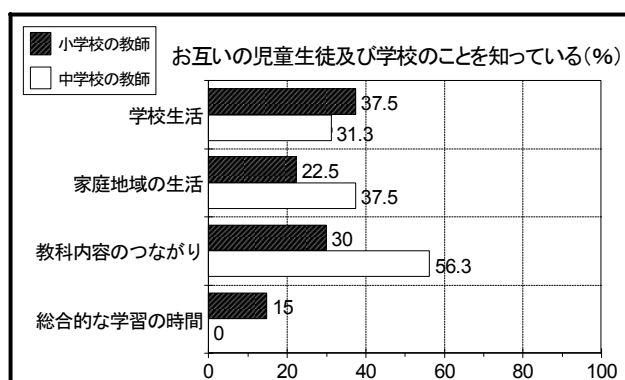
(ウ) 情報の伝わり方・伝え方について

【グラフ12】からは、小学生が中学校の情報を得るのは「親」「兄弟姉妹」「友だち」「先輩」の順に多く、「学校の先生」は8%であった。小学校としては、学校によっての取組に若干の差はあるものの、学校通信等で情報を発信しているにとどまり、学級担任から中学校の詳しい情報が伝わることは少ない。中学校の情報は、家族や友人からの伝達に限られているようである。

【グラフ13】では、小・中学校の先生にお互いの学校のことを知っているか調査した。「教科内容のつながり」について中学校の先生の反応が半数を超えた以外、他の項目は4割を切っており、お互いの学校のことをあまり知らないことが分かる。実際、中学校の情報を知る機会が、全職員に関しては年3回計画されている3校合同研修会のみで、他に各主任が集



【グラフ12】



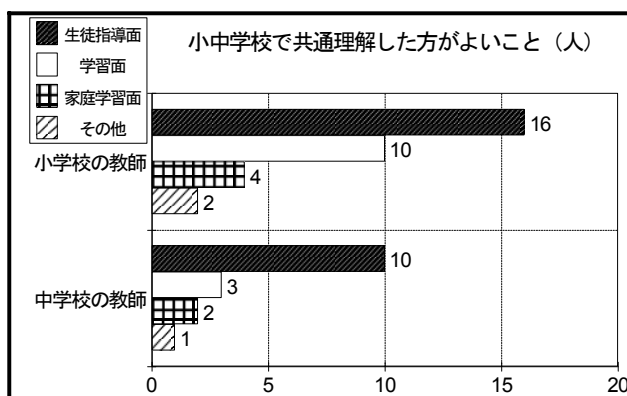
【グラフ13】

まる定期的な会等があるが、そこでも各学校ごとの細かな情報交換は難しい。

また、【グラフ14】にあるように、小・中学校の教師は、小中連携として、生徒指導を基盤とした9年間の発達段階に即した共通指導を行っていかねばならないと考えている。

子どもたちに中学校の正確な情報を伝え、不必要な不安感をもたせないようにするには、教師同士がお互いの学校の正確な情報をもつための手立てを見直す必要がある。

新潟県では、小中連携において正確な情報が伝達されるように、各中学校区ごとに工夫した連携シートを活用し、これまであった小学校6年生間の曖昧な噂がなくなるという大きな成果を挙げている。



【グラフ14】

(4) 意識調査の結果と考察のまとめ

ア 交流活動に関して

小学生の中学校生活に向けての不安を少なくするためには、それぞれの学校生活を楽しくすることが大切だと分かった。そして、子どもたちに学校生活を楽しく感じさせるためには、人間関係に関する悩みを取り除くことが一つの方法である。特に、中1ギャップを感じる子どもたちは、中学校に進学した後、できるだけ早い段階で中学校生活に馴染むことができるための手立てが必要だと考える。

(ア) 小・中学校間の交流活動

- a 中学校の状況や中学生の様子を実感できることで不安が解消され、自分で感じた情報が子ども自身や家庭内に確実に伝わる。また、中学校の生活に早く馴染むことができる。
- b 入学以前に中学校の先生とのふれ合いがあることで、中学校の先生と再会するイメージでの出会いができ、否定的な感覚を少なくすることができる。
- c 保護者の期待する「子ども自身が中学校のことを少しでも知っておくと、中学校進学がスムーズにいくのではないか」という考えに応えることができる。
- d 教師の意識の中で、小・中学校の交流活動を実施していくことが、教師の負担増につながるのではないかと不安があるため、その点に配慮した手立てが必要である。

(イ) 小学校間の交流活動

- a 中学校入学以前の小学校段階から交流をし、お互いのことを知っておくことで、中学校入学期のできるだけ早い時期に、新しい人間関係を構築させやすくなる。
- b 教師の負担増や移動等に配慮し、時間設定等の工夫や手立てが必要である。

イ 教師間連携に関して

中1ギャップを感じる子どもたちの人間関係にかかわる手立てをとるためには、小・中学校の教師が、子どもたちのことについて細かく理解しなければならない。中1ギャップを感じる子どもは、内面にそれを秘めているため、全児童の情報伝達が必要である。そのためには、確実に情報を伝えられる組織や方法について考えることが不可欠となる。

また、小・中学校のつながりをスムーズにし、中1ギャップを克服しやすくするために、小・中学校の教師が、生徒指導面を中心に、お互い共通理解して取り組むべき内容を検討していく必要がある。

(ア) 情報の伝達

- a 年度末の情報交換会で確実な情報伝達を行うために、これまでの仮学級名簿作成用の情報シートを、より確実な情報シートへ改善し、全児童の情報を小・中学校通して活用する。
- b 家庭での子どもの様子や保護者の願いを子どもの成長段階に合わせて把握することで、子ども一人一人への細かな配慮が確実にしやすくなる。

(イ) 3校合同研修会

- a 全体での相手の見える研修会というだけでなく、研修会に向けた組織編成を細かな目的意識に合わせたものにする。各学校の組織編成もそれに合わせ、相互の意見交換がしやすい組織を中心に研修会を行う。そこから、全体に情報を流すことで、お互いの学校の細かな部分にまで目が届き、ズレのない確かな情報を基に手立てをとることができる。
- b 生徒指導面を中心に小・中学校間で共通理解し、子どもたちへの指導を小・中学校でスムーズなものにして、小学校と中学校の指導のギャップを緩やかなものにする。

3 中1ギャップ克服に向けての手立て

(1) 交流活動の工夫

静岡県沼津市の学校では、小学校と中学校との交流活動を通して、「中学校への希望がもてるようになった。」「同じ中学へ進学する仲間としての意識をもつことができた。」という成果が挙げられている。また、千葉市でも、お互いの理解を深め信頼関係を築き、よりよい人間関係の中で安心した学校生活を送るためには、児童・生徒の交流が必要であると考えなど、各地で小学校と中学校の交流活動が計画・実践されてきている。

今回の意識調査より、妻中学校区でも、小・中学校間また小学校間で交流活動を行うことが、児童の中1ギャップの克服に有効的だと考えられる。そこで、妻中学校区における実態を基に交流活動の手立てを考える。

ア 小・中学校間の交流活動

小・中学校間の交流活動においては、以下の4点に留意して手立ての工夫を行う。

- 中学校の状況や中学生の様子を児童や保護者が実感できるように、児童が、中学校で行われる行事を実際に体験する。
- 早期の人間関係づくりを考え、活動の時期や場を考慮する。
- 中学校の教師を知り、入学時に安心感が広がるように、児童と中学校の教師がふれ合うことのできる活動を行う。
- 教師の負担につながらないように、これまで行われてきた行事や活動を基本に計画する。

(ア) 中学校の行事（新入生体験入学）

次ページの【資料1】と【資料2】の「新入生体験入学実施要項（案）」は、今年度まで行われてきた「新入生説明会」に代わるものである。

この、「新入生体験入学（案）」では、違う学校から進学する児童や保護者が、同じように中学校の状況や中学生の様子を知り、中学校に関しての情報を共有することを目的としている。まず、これまでの入学説明会1回（12月）を体験入学2回の複数開催にする。また、1回目は、できるだけ早い時期での開催とする。さらに、これまでに行われていなかった授業体験や部活動体験を実施する。そうすることで、児童や保護者一人一人が、早い時期から、入学までの長い期間、中学校を肌で感じ、より正確な情報としてもつことができる。

このように、これまで参加していた中学校の行事の内容を見直したり工夫したりすることで、児童や保護者の中学校進学への不安が減少すると考えられる。

第1回新入生体験入学実施要項(案)

1 目的

- 新入学予定児童やその保護者に、妻中学校の様子や、雰囲気を感じてもらい、中学校への期待、希望を抱かせる機会とする。
- 生徒会には、後輩を育てる活動や行事の運営の一つとして活躍する場とする。

2 日時

- 平成20年8月〇日()

3 場所

- 妻中学校(体育館及び各活動場所)

4 参加者

- 妻北小学校・妻南小学校6年生及び保護者

5 内容

- ① 13:00～13:25 受付
- ② 13:30～13:35 学校長の話
- ③ 13:35～14:00 学校説明(教務主任・生徒指導主事)
- ④ 14:00～14:15 学校紹介(生徒会)
- ⑤ 14:15～14:30 移動(トイレ休憩含む)
- ⑥ 14:30～15:00 体験授業1
- ⑦ 15:10～15:40 体験授業2
- ⑧ 15:40～15:50 部活動体験説明(体験授業クラス)
- ⑨ 16:00～16:30 部活動体験

※ 終了後、解散。

6 その他

- 4月初めに、年間行事計画の連絡を小・中学校間で行う。
- 5月中に、児童の希望教科及び活動希望クラブ調査依頼を送付する。
- 6月6日(金)までに、調査書を回収する。
- 6月中の3校合同研修会(部会)において、調整を行う。
- 7月11日(金)までに、新入生体験入学案内を小学校へ送付する。

・1回目の時期を早くすることで、児童も保護者も興味・関心を早くからもつことができる。

・夏期休業中なので、授業時数等の操作が必要ない。

昨年度まで説明会で行っていった内容を8月に実施することで、これから半年が中学進学に向かう準備期間であることを、児童や保護者に意識させることができる。

・体験授業によって、新教科や新しい学習内容への興味・関心を高め、中学校への期待や希望を感じさせることができる。

・体験授業を楽しく受けることが、中学校の先生を肯定的に受け止める場となり、中学校に対して、安心感を広げることができる。

交流活動で、最も楽しみとする部活動のよさを体験することで、部活動への関心を高めるとともに、中学校全体の不安も減らすことができる。

【資料1 第1回新入生体験入学実施要項(案)】

第2回新入生体験入学実施要項(案)

1 目的

- 前回の体験入学からこれまでの期間で、児童や保護者が感じた疑問等を解決することで、中学校への不安やストレスを減少させる機会とする。
- 生徒会には、後輩を育てる活動や行事の運営の一つとして活躍する場とする。

2 日時

- 平成20年12月〇日()

3 場所

- 妻中学校(体育館及び各活動場所)

4 参加者

- 妻北小学校・妻南小学校6年生及び保護者

5 内容

- ① 15:00～15:20 集合・質疑・応答
- ② 15:25～15:40 授業参観
- ③ 15:40～15:55 移動(トイレ休憩含む)
- ④ 15:55～16:25 体験授業
- ⑤ 16:25～ 部活動自由参観・個別相談

※ 終了後、解散

6 その他

- 9月中に、児童の希望教科調査依頼を送付する。
- 10月10日(金)までに、調査書を回収する。
- 10月中の3校合同研修会(部会)において、調整を行う。
- 11月14日(金)までに、新入生体験入学案内を小学校へ送付する。

新生徒会には、在校生だけでなく、新入生を意識したこれからの活動を考えさせられる。

1回目からこれまでに疑問に思ったり心配になったりしたことを、2回目の場で解決することで、中学校への安心感へつながる。

体験授業を3回(前回と合わせて)受けられることで、新教科への興味・関心が高められ、中学校の先生をより多く知ることができる。

1回目で体験した部活動や興味を感じている部活動の再確認をする場となる。

児童も保護者も、実際の授業を参観することで、体験授業とは違う意味で中学校を実感できる。

中学校の教師に個別相談をしておくことで、子どもが入学した後の指導の不安を減少できる。

【資料2 第2回新入生体験入学実施要項(案)】

(4) 小学校の行事（妻南小学校の場合・南っ子ふれ合い広場）

下の【資料3】「南っ子ふれ合い広場計画（案）」は、これまでの、総合的な学習の時間・生活科で取り組んできた「地域の方々とふれ合いながら遊び道具を作る体験活動を行う」という活動に、地域の中学生を積極的に参加させることで、小学生が中学生とふれ合い、中学生のよさを知る機会とすることができる。その中で、中学生が低学年等に優しく接している姿などから、中学生に対して抱えている不安感を減少させることもできる。

一方、中学生が交流活動を行う際に課題となっている目的意識については、現在地域で研究している人権教育と絡め、年下に対する接し方や優しさなどを学ぶ機会となる。また、自分たちの住んでいる地区の小学生との活動であることや、自分たちが地域の人から頼りにされていることを感じ取ることから、地域の一員であることを実感させることができる。

【単元名】 「南っ子ふれあい広場」で楽しもう。				
【目標】 ・ 地域の方々（中学生を含む）に協力してもらいながら、遊び道具作りの計画を立て、異学年で協力し、楽しんで作ったり遊んだりすることができる。 ・ 地域の方々（中学生を含む）の知恵に学んだり、尊敬の念をもったりするとともに、人との交流を大切にし、積極的にかかわることができる。				
【単元の流れ】（総時数8時間）				
段階	学習内容及び学習活動	資料・学習の場	中学生との関連	時数
事前	○ 各地区子供会で事前の話し合いを行う。 <i>中学生は、小学生の頃に経験したことを基に、遊び道具の提案や意見を述べ、小学生をリードすることで、リーダー性が育てられる。</i>	各地区の公民館	○ 育成会長と地区の担当者そして、地区の中学生が中心になり、各地区の子ども会での話し合いを行う。	※
つかむ	1 決めた遊び道具の発表をする。 2 作る道具のイメージをつかみ、めあてを設定する。	地区教室 各地区の「ふれ合い広場」担当者	○ 地区の人や中学生からのアドバイスを生かし、高学年が低学年をリードする。	2
見通す	3 計画を立てる。 <i>中学生も高学年児童も、地域の中でつながっていることを意識させられる。 活動目的に対する中学生の意欲を向上させるとともに、小学生とのつながりを意識させられる。</i>		○ 地区の人や中学生への依頼文書（手紙）を作成し、中学生に必要感を感じてもらおう。	
調べる	4 遊びをする。 <i>中学生が、低学年に優しく接している姿を見て、中学生に対する安心感を高学年児童にもたせられる。 中学生は、小学生に的確なアドバイスをしたり、よくできているところをほめたりすることで、地域の下級生を育てていこうとする意識を高められる。</i>	地区活動場所 ・材料	○ 地区の方に作り方・遊び方を説明してもらいながら活動できるようにする。その際、中学生は、地区の人の説明のサポート役をする。 ○ 担当教師が中学生の行動の有効性を認め言葉かけを行う。	3
	5 作品を紹介し合う。 <i>高学年は、他学年と意見交換をしながら、中学生のよさを認識できる。</i>	各教室	○ 地区の人や中学生に教えてもらったよさについて子どもたちが共有し合う。	
まとめる	6 活動を振り返る。 <i>中学生が「やって良かった。」という成就感を感じられる。</i>	地区教室	○ 指導してもらった地区の人や中学生にお礼の手紙を書く。	1

【資料3 南っ子ふれ合い広場計画(案)】

イ 小学校間の交流

小学校間の交流活動においては、以下の4点に留意して手立ての工夫を行う。

- 2校の小学生が6年間の中で、お互いを知ることができる活動を行う。
- 中1ギャップの克服という視点で、同じ学年の交流活動を考える。
- 西都市中心街（及び妻中学校）を挟んで約1.5 kmぐらいしか離れていない立地条件を生かして、お互いの学校を行き来したり、お互いに校外に出て同じ場所で交流したりする方法を考える。
- 教師や保護者の多忙感につながらないように、これまで行われてきた行事や活動を基盤に考える。

(ア) 合同遠足交流活動計画

同じ学年の小学生同士が、同じ場所へ行って交流する活動として、遠足や宿泊学習での交流活動計画を考えてみた。

【表1】の「これまでの遠足計画」を見て分かるように、同じような立地条件にある妻北小学校と妻南小学校は、学年こそ違っても同じ場所に出かけているのがよく分かる。また、全く同じ場所でないにしても、目的としては同じであったり、遠足の場所がすぐ近くであったりしているケースも見られる。

そこで、これまでの各学校の遠足計画のねらいを主としながらも、各学年の発達段階に応じて同じ場所で遠足を行い、他校との交流活動が行える計画（案）を【表2】のように作成した。6年間の小学校生活を通しての取組は、小学校入学前の校区を越えた友だち関係の継続にもなると考える。

また、両校からの距離に大きな差が出ないようにすることや、学級づくりに遠足の役割が大きいことも考え、低・中学年では、2年間に1回の計画とすることなどを配慮した。

【表1 これまでの遠足計画】

学校 学期	妻北小学校		妻南小学校	
	1	2	1	2
1年	都萬神社 中妻公園	市給食センター ルピナスパーク	下妻公園	フェニックス 自然動物園
2年	下妻公園	宮崎中央郵便局 宮崎市科学技術館	西都原運動公園	宮崎駅・青島
3年	西都原公園	デザートアパレル 久峰公園	清水台総合公園 市給食センター 似たような場所	東洋ソーイング 松本食品 大淀川学習館
4年	宮崎市科学技術館 エコリーゾラ宮崎	西都原古墳群・公園	杉安いげき 市浄化センター 西都児湯クリーンセンター	宮崎県庁 県総合博物館
5年	清水台総合公園	宿泊学習	県総合博物館	宿泊学習
6年	修学旅行 (鹿児島方面)	西都原公園 西都原考古博物館	修学旅行 (鹿児島方面)	西都原古墳群 古代生活体験館
備考	※3学期は、両校ともお別れ遠足（西都原）			

【表2 合同遠足交流活動計画(案)】

	場所等(学期)	交流に関わる目的
2年	下妻公園(1) ※両校から約1 km	・公園の木々や草花に接し、自然に親しむとともに、同じ学年の友だちや <u>他校の友だちと仲良くなる。</u>
4年	西都原運動公園 or 清水台総合公園(1)	・深緑の美しさを味わいながら、級友との親交を深めるとともに、 <u>他校の友だちとの再会を楽しむ。</u>

	※両校から約 1.5 km	
5 年	合同宿泊学習(2) (青島少年自然の家)	・ 集団宿泊生活を通して、規律ある生活を体験しながら、 <u>他校の友だちとの友好を深める。</u>
6 年	西都原古墳群(2) ※妻北小から約 1 km ※妻南小から約 2 km	・ 西都を代表する史跡を、教科的視野から親しむとともに、 <u>他校の友だちと一緒に活動しながら友好を確かめ合う。</u>

(イ) 「さいと学」交流活動計画

平成 20 年度から始まる「さいと学」は、小学校から高等学校まで一貫した教科として取り組まれることになる。特に、小学校高学年の「さいと学」の単元では、市内で統一した例示がされている。そのため、取り組む内容が学年で同じになるので、下の【表 3】で示すように、単元の導入や終末の段階での合同の活動を計画することで、違う学校でも、共通したねらいをもって学習することができる。また、違う学校で同じ学習を進めることで、それぞれの発表の違いに気づき、それぞれの良さを認め、中学校で一緒に「さいと学」を学習するイメージをつくることができる。

【表 3 6年生の単元の計画例(案)】

単元計画			
題材	月	時間	活動
下水流白太鼓踊りの歴史や特徴を調べ、子ども白太鼓踊りを踊ろう	6～9	1	※保存会の下水流白太鼓踊りを北小も南小も一緒に見る。
		2～5	・下水流白太鼓踊りの歴史や特徴を調べる。
		6～10	・5年生に子ども白太鼓踊りを伝える。
		11～15	・5年生と合同で子ども白太鼓踊りを練習し、秋季運動会で披露する。 ・白太鼓踊りについて、気付いたこと、考えたこと、感じたことをまとめる。
西都原古墳群について調べよう	10～12	16～20	・西都原古墳群の名称や特徴を調べる。
		21～26	・西都原古墳群を見学し、現在の様子についてまとめる。
		27～31	・西都原古墳群について気付いたこと、考えたこと、感じたことをまとめる。
体験をみんなに知らせよう	1	32～33	・記録した「気づき、考え、思い」をまとめ、発表資料を作成する。
		34～35	※発表資料をもとに、西都の歴史や伝統のよさや課題の発表を行う。

・下水流白太鼓踊りの特徴を調べる前に、地域保存会の方々の踊りを体験し、地域に残るこの踊りの歴史や特徴について、両校同時にねらいをつかませることができる。

・「さいと学」の学習を市内のどの小学校でも実施していることを知ることで、お互いの小学校の友だちを意識しながら学習活動を行うことができる。

・合同遠足で、「さいと学」を意識した活動を行えば、見学時に調べたことをまとめる際に、お互いの学校の友だちを意識した学習活動が行える。

・お互いの学校の友だちに発表を聞いてもらうことを意識して作業を行うことで、相手に分かりやすいものにしてしようとする積極性が出てくる。

・ねらいを共通して押さえているため、違う環境で学習を進めていながらも、同様の感覚で発表を聞くことができる。そして、自分たちとはどこが違うのか、どんな良さがあるのか、普段の授業以上に相手を意識しながら聞くことができる。

・事前に、担任同士が、同じような発表をするグループの把握をしておき、グループ同士の意見交換会の場を設定すれば、お互いを知る機会の一つになる。

(2) 教師間連携の工夫

教師へのアンケートからは、それぞれの学校の様子や児童生徒の生活の様子について状況把握がうまくできていないことが分かった。そして、お互いの教師が、子どもたちの中1ギャップ克服のためには、教師間でも確実な情報のやりとりができていなければならないという認識をしている。そこで、教師間連携の工夫としての手立てを以下に挙げる。

ア 連携補助シート

以下の【資料4】【資料5】の「連携補助シート」は、妻中学校区の小中学校の先生が、お互いの学校に、それぞれ知らせたいことや知っておきたいこととして出された内容を確実に引き継ぐためのシートである。小学校から中学校への正確な情報の受け渡しは、中1ギャップの克服が困難な子どもをサポートする教師にとって大変貴重な情報となる。

これまで使われてきた引き継ぎのためのシートは、年度末に各小学校の名簿に、気になる児童の特徴について記入したものと仮学級名簿作成のための小さなカードに特記事項について記入した程度であった。また、引き継ぎ公簿として「指導要録」の存在があるが、常時手元に置けるものではない。

今回作成したシートの記載内容は、中学進学直前の6年生時のみの情報や特定の児童に限った情報ではなく、進学する全員の児童に関しての伝えたい情報、知りたい情報を最低限の情報として9年間記載できるものとする。継続した情報の書き込みによって、それぞれの子どもの多様な変化の情報を得ることができる。手元に置いておくことで、気付いたときに記入したり、学期末等の区切りで記入したりと担任の記入しやすい方法で記入できる。

連携補助シート	(ふりがな)		性		保護者名	
	氏名		平成	年		
学 校 名	西都市立 小学校				西都市立 中学校	
学 年 ・ 学 級	1年組	2年組	3年組	4年組	5年組	6年組
年間欠席日数	日	日	日	日	日	日
別室登校等 (特別・福祉室)	日	日	日	日	2月末日	日
中学校進学時仮学級名簿兼用欄 (6年担任記入)					5学級	4学級
学習総合評定	5	4	3	2	1	A B C D E A B C D
行動の主な特徴						
その他の参考事項						
教育相談関係機関との連携について						
<input type="checkbox"/> 特になし <input type="checkbox"/> 教育相談関係センター <input type="checkbox"/> 医療機関 <input type="checkbox"/> その他 () 欠席や登校に関する事で気になること～欠席の理由・きっかけ・背景等～ ・ () (年) (年) (年) ・ () (年) (年) (年) ・ () (年) (年) (年)						
学校生活の様子 ・ () (年) (年) (年) ・ () (年) (年) (年) ・ () (年) (年) (年)						
学習面の様子 ・ () (年) (年) (年) ・ () (年) (年) (年)						
家庭生 ・ () (年) (年) (年) ・ () (年) (年) (年)						
中学校進学時仮学級名簿兼用欄について ※「学習総合評定」については、国語、社会、算数、理科の評定を参考に総合的に判断して○を付けてください。 ※「仮学級名(A-E)」については、中学校に学級数を確認の上○を付けてください。 ※「行動の主な特徴」については、生徒指導上の参考事項をお書きください。 ※「その他の参考事項」については、学級編成上の配慮事項についてお書きください。 例)～が得意、～の理解が不十分、～委員、リーダー・性有、家庭環境の特異、世話好き、PTA役員等への可能性、など。 ※特記事項等ございましたら、裏面にお書き下さい。						

毎年、同じ観点別に記載するので児童の変化に気付きやすい。また、指導要録に記載されない課題点等についての記載も観点ごとに行い、中学校の要望に応える。

各学年での担任の所見が入るので、一人の児童を多面的にとらえた情報になる。

特記事項記入欄	
不登校児への対応、特別支援教育関係、家庭との連携(対応)、関係機関との連携(対応)、その他	
<p>児童の様子等で伝えておきたいことを自由に記載できる。さらに、児童への接し方や指導の仕方も細かく記載できるようにすることで、小学校教師が中学校へ伝えたいとしている教育活動内容全般を伝達できるようになる。</p>	
<p>中学校の実情として知っておきたい課題等については、小学校と中学校をつなぐ視点で必要な情報を記載することで、伝達しやすくなる。中学校もこの情報から気になることを問い合わせることもできる。</p>	
<p>毎年、活用の仕方について教師の共通理解を十分に行う必要がある。</p>	
<p>連携補助シートの活用について</p>	
<p>1 連携補助シートの目的</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学校、学年や校種を超えて一貫した指導を継続的に行うため ○ 児童生徒の状態や必要としている支援の適切な把握のため 	
<p>2 活用の留意点</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 客観的な事実のみを記載し、主観的な判断や感想は記入しない。 (2) 進学、進級の際の引き継ぎ資料として活用し、一貫した効果的な支援に生かせるようにする。 (3) 管理については学級担任が行うが、その管理方法については各学校で共通理解のもと確実に行う。 (4) 家庭や関係機関との連携を図る際に、積極的に活用できるようにする。 	
<p>3 その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 連携補助シートの作成にあたっては、新潟県教育委員会作成の「中1ギャップ解消に向けて」(中1ギャップ解消プログラム)の小中連携シートのモデルを参考にしている。また、平成19年度に妻中学校区で行った「学校教育に関するアンケート」(保護者・教職員向け)の結果をもとにしている。 	

【資料4 連携補助シート(表)】

【資料5 連携補助シート(裏)】

イ 一貫教育補助シート

下の【資料6】【資料7】の「一貫教育補助シート」は、各家庭に依頼して作成していた家庭状況調査票（学校によって名称は違う）に代わるものである。妻中学校では、生徒指導票として活用されている。これまでは、各学校のみの使用であったため、独自の形式で作成していた。

今回、情報の共有化の視点から、同じ中学校へ進学する子どもたちについての家庭状況調査等について、継続して伝えられるように一つのシートにした。独自で作ったシートを中学校に渡すよりも同じ形式で伝えた方が見やすく分かり易い。さらに、小学生及び各家庭にとっては、中学校に進学した後のシートも目にする事ができるため、今後中学校に進学して聞かれる情報に関しての心構えもでき、一つの中1ギャップの克服材料になり得る。

妻中校区一貫教育補助シート(西都市立妻北・妻南小学校・妻中学校)										
姓(ふりがな)	性	保	護	者	名(ふりがな)	総	稱			
平	年	月	日	生	年	月	日	支	会・育	
現住所 (児童生徒と異なる場合は※1へ) 支会・育成会名										
電 話 ①自宅 ②緊急連絡先 ③その他()										
入学前 年 月 ~ 年 月 () 年間 () 幼稚園・保育所 (園) 病 () 才 病名 () 重い・普通・軽い										
保育歴 年 月 ~ 年 月 () 年間 () 幼稚園・保育所 (園) 歴 () 才 病名 () 重い・普通・軽い										
家	姓	氏	名	兄	弟	姉	妹	年	組	
	本	人								
備 考(兄弟姉妹が学生の場合、年・組を鉛筆書きをお願いします。)										
健康(検診で気をつける点(入学後の病歴等))										
食 事 面 好き嫌い(多い・少ない) 食事(普通・少食) 食物アレルギー(有【 】・無【 】)										
下 ぎ な こと や 興 味 が 有 る こと の 文 書 等 を 願 望 する 年 組 () 年 組 ()										
相 友 だ ち ※年・組は、鉛筆でお願いします。										
学	担任に知っておいてもらいたいこと								保	護
1	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									
2	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									
3	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									
4	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									
5	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									
6	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									
中1	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									
中2	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									
中3	得意教科() 不得意教科() 1日の平均学習時間()分									

【家族構成】
家族構成等の記載内容を統一することで、教師間の意識の違いをなくしたり、保護者に安心感を与えたりすることができる。

【1日の平均学習時間】
家庭での学習時間の変化が分かる上に、家庭での学習時間に関する意識の高まりにつながる。

児童・生徒氏名		(中学校進学後の記入欄)																							
中	学	前	年	月	立	小	学	校	卒	業	転	入	年	月	立	中	学	校	か	ら	転	入			
						1年		2年		3年															
学	習	関	係	家	庭	教	師	塾	名	称	曜	日	時	間	時	時	時	時	時	時	時	時	時		
																								けいこ	名
進路希望(家庭の教育方針)		本人		親しい友人		本人		保護者		本人		保護者		本人		保護者		本人		保護者		本人		保護者	
<p>【進路希望等】 中学生のみに関わる記載項目について事前に見ることができ、小学校から中学校進学時の一つの不安が減る。</p>																									
<p>生活状況 本人の家での様子</p> <p>本人の趣味・娯楽</p> <p>こづかい(月平均)</p> <p>自宅付近略図(目印等) ◇小学校まで()km、中学校まで()km ◇通学方法 徒歩()分 バス()分 自転車()分 その他()分</p>																									
<p>※小学校への要望等がありましたらお書き下さい。</p> <p>※中学校への要望等がありましたらお書き下さい。</p> <p>保護者の方々からの正確な情報を元に、小・中学校通して子どもたちを安全に育てていくためのシートです。</p> <p>※このシートは、妻中校区の小・中学校共通です。中学校まで使用します。年・組記述欄は、鉛筆書きをお願いします。</p> <p>※自宅周辺路内の通学方法等については、中学進学の際に再確認(変更等)をお願いします。</p> <p>※このシートは、学校(学級担任)が保管し、教育指導以外で使用いたしません。</p> <p>※このシートを元に諸書類が作成されますので、市役所へ届ける文字で正確な記入をお願いします。</p>																									

【資料6 一貫教育補助シート(表)】

【担任に知っておいてもらいたいこと】

- ・保護者が子どもの成長に合わせて、どのようなことを担任へ伝えたかったのか次の学年以降の担任が知ることができる。
- ・子どもの成長に合わせた保護者の要望をそれぞれの担任が知ることによって、保護者にも安心感が生まれる。

【備考欄の説明】

小・中学校の9年間で子どもたちを育てていくために、このシートが子どもたち一人一人のために役立つことを保護者に理解してもらおう。

【資料7 一貫教育補助シート(裏)】

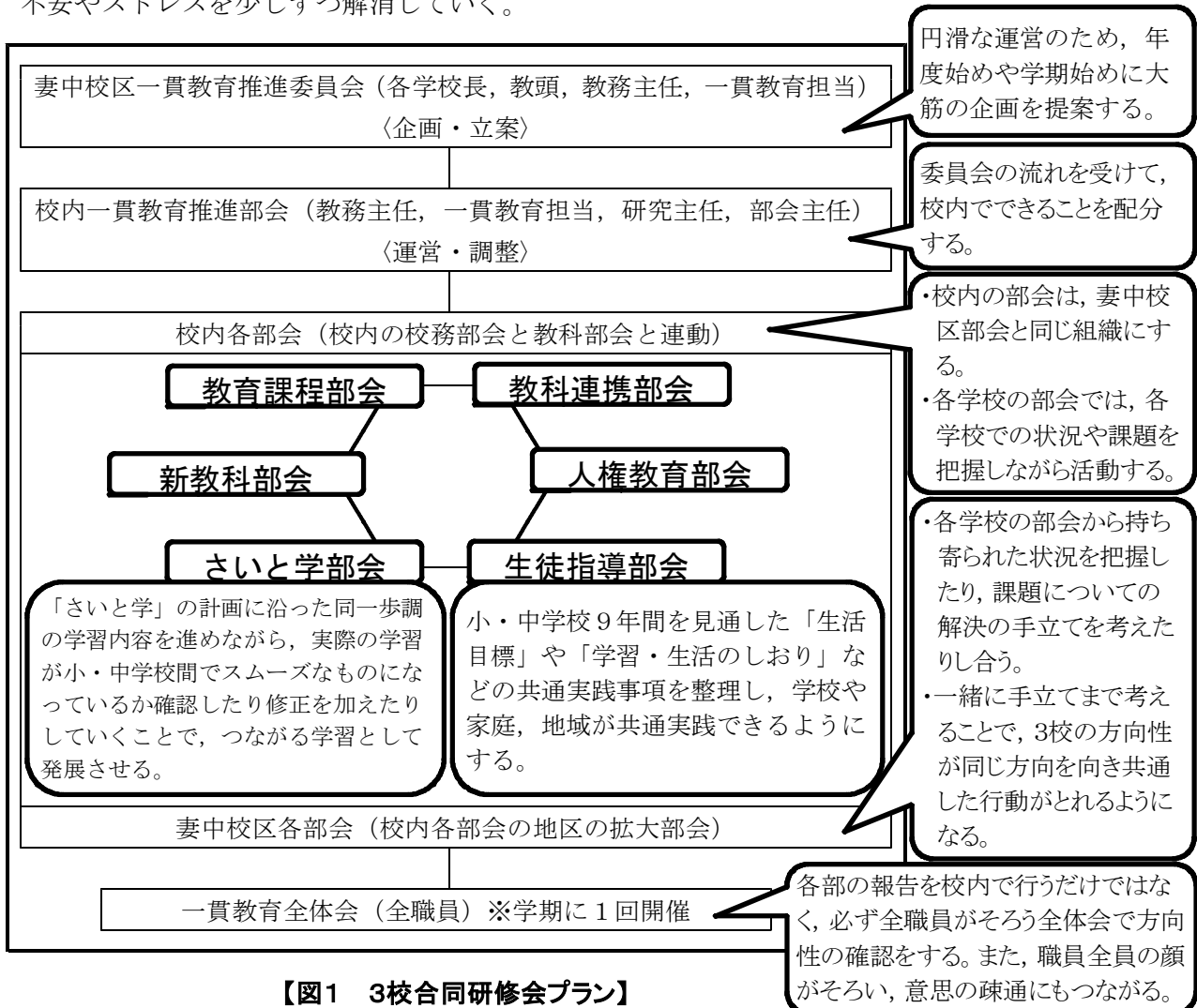
ウ 3校合同研修会プラン

妻中学校区の「3校合同研修会」は、先にも示したように、3校の職員の「互いの顔の見える研修会」として今年度から始まった。そこには、学習指導及び生徒指導上の課題や方針等について話し合いながら、児童生徒の学力向上、健全育成のために相互の連携を深め、指導の充実を図るといふねらいがある。その中には、学校全体の広い範囲のことだけでなく、ごく一部の児童生徒の様子をお互いに理解しスムーズな進学を助けていきたいという願いも含まれる。もちろん、中1ギャップを抱く児童生徒のスムーズな進学もその一つである。

そこで、今後、もっと細かな部分にまで相互の連携を深め、指導の充実を図るためには、現在行われている全体会以外にも、少人数で具体的な話し合いの行える部会を設置する必要がある。下の【図1】の中に、各部会（案）を示している。

3校合同研修会の中で、生徒指導面を中心に共通理解を深め、小学校と中学校の子どもたちへの指導のギャップを緩やかにする必要があることは、前述した通りである。そこで、特に、生徒指導部会では、妻中学校区の実態に合わせた小・中学校共通の「生活目標」を設定し、それを基に、9年間を見通した「学習・生活のしおり」を作成する。子どもたちの発達段階を考慮し、小中学校が同一歩調で共通実践することで、生徒指導部における指導のギャップも解消されると考える。また、このしおりを地域や家庭にもパンフレット等を利用して配布し、妻中学校区のすべての方々に、子どもたちを見守る体制づくりを図りたいと考えている。

このようにして、生徒指導面の指導のギャップを緩やかなものにしていくことで、子どもたちの不安やストレスを少しずつ解消していく。



【図1 3校合同研修会プラン】

Ⅶ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 小・中学校間の交流活動計画を作成したことで、小・中間の交流活動への道筋ができ、児童が早い時期から中学校を意識する流れを作ることができた。
- (2) 小学校間の交流活動計画を作成したことで、中学校入学以前の間関係構築の幅を広げる機会を設けることができた。
- (3) 小・中学校の教師間で、子どもの発達段階に応じた児童生徒理解を細かく見取り、それぞれの指導の充実が図れるように、教師間連携のためのシートを作成したり、研修会の在り方を提案したりすることができた。

2 今後の課題

- (1) 本研究で作成した資料について、3校で詳細な打ち合わせを行い、実施可能なものに改善していく必要がある。
- (2) 交流活動の計画を次年度以降に実施し、その有効性を検証しながら、改善・精選した活動の実践を繰り返していく。
- (3) 教師間連携のためのシートの有効性や中1ギャップへの意識の変容を見るため、今回行った意識調査アンケートを継続し、実践の改善を行っていく。
- (4) 今後、本研究を推進していく中で、妻高等学校との連携を図っていく必要がある。

— 引用文献 —

- ¹⁾ 宮崎県教育委員会 (平成15年3月)『学校教育を中心とした宮崎の教育創造プラン』(p.107)
- ²⁾ 文部科学省 (平成19年2月)『中等教育資料(平成19年2月号)』ぎょうせい(pp.12-13)
- ³⁾ 新潟県教育委員会 (平成19年2月)
『中1ギャップ解消に向けて～中1ギャップ解消プログラム』文書館(巻頭)
- ⁴⁾ 児島邦宏・佐野金吾編(平成18年6月)
『学校改革選書 中1ギャップの克服プログラム』明治図書出版株式会社(p.12)

— 参考文献 —

- 文部省 (昭和56年10月)『生徒指導の手引き』大蔵省印刷局
- 文部科学省 (平成19年2月)『中等教育資料(平成19年2月号)』ぎょうせい
- 新潟県教育委員会 (平成19年2月)
『中1ギャップ解消に向けて～中1ギャップ解消プログラム』文書館
- 西都市 (平成19年3月)『平成18年度 市民満足度調査報告書』
<http://www.city.saito.miyazaki.jp/busyu/sogo/pdf/manzokudohokoku.pdf> [平成19年4月取得]
- 西都市 (平成18年3月)『第三次西都市総合計画後期計画』
<http://www.city.saito.miyazaki.jp/osirase/sogo/sogo.html> [平成20年1月取得]
- 児島邦宏・佐野金吾編(平成18年6月)
『学校改革選書 中1ギャップの克服プログラム』明治図書出版株式会社
- 文部科学省諮問機関不登校問題に関する調査研究協力者会議(2003年)
『今後の不登校のあり方について(15年報告)』
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター(平成15年7月)
『生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導』ぎょうせい

〈研究実践学校〉西都市立妻南小学校 〈研究協力校〉西都市立妻中学校、西都市立妻北小学校